



あと1日に向けて

先ず、誰もが何となく感じながらも、それを誰かがやってくれないかなあ…どうしようかなあ…まあ、何とかなるかなあ…などと考えてそのままにしていることを、勇気をもってみんなの前で取り上げ、キチンと問題点を指摘することが、どんなに大変なことか、よく想像してみることだ。

*

星陵祭中に部活が予定されている人の中には、運動部にしろ、文化部で発表がある人にしろ、クラスの劇には最後まで関わりきることができないので、色々感じながらも遠慮している部分がある人もいるに違いない。それはそれで正常な感覚であるとは思いますが、同時に、そういう立場だからこそ、できる範囲でできるだけの協力をしようと思っているのに、時間が無駄に使われていたり、やるべきことがなされていなかったりすれば、そういう現状に甘んじている人のことが気になったり、やる気が失せてしまったりすることもあるだろう。

O沢親分も、きっとそんな気分だったのかも知れない。そんな時、来年があるから…とか、私は試合でいないから…といった考え方をしないで、ここはやっぱりみんなに伝えようと決心し、しっかりと現状を分析して問題点を明確にした上で、それをきっちり伝えたことは素晴らしいことであると思う。

同時に、もし親分が「どうせこのクラスにこんなことを言っても仕方ない」と感じているとしたら、ああいう発言にはならなかっただろうことを考えると、あの発言には、「言えば、きっとみんなはそれを受け止めてくれるに違いない」という、親分のこのクラスに

対する大きな信頼があったことも分かるのだ。だからこそ、私はうれしく思うし、「こんなことを親分に言われているようでは、このクラスはダメだなあ〜」と思うのではなく、「イイクラスなんだなあ〜」としみじみ思うのである。

親分の信頼の思いに応えよう。今後のことは、受け止める側の人みんなに託されたのである。思いを受け止め、それを実際の行動に移すことができるクラス。そういうクラスであることを、担任は期待しているし、そうであると信頼もしている。

*

ところで、前にも書いたことがあるが、学校は常に「みんなで…」を求めがちな空間でもある。特に、行事を大切にしている日比谷ではその傾向は顕著である。だから、そのことに違和感を感じている人もいるだろう。

しかし、学校、特に日比谷がそういう空間であり、その空間で大きなメリットを受けながら生活している以上は、違和感を感じている人も、「みんなで…」という雰囲気「できる範囲」で協力する姿勢を持つことが、礼儀であり大切だろう。

さらに、その「できる範囲」を広げる努力を継続することもより一層大切である。というのも、「できる範囲」を広げる過程にこそ、自分の新たな可能性との出会いが内包されているからである。「自分はこうだから…」と安易に決めつけず、常に新たな自分との出会いを求めて、この日比谷での日々を過ごしていったほしいものである。

さあ、準備もあと1日！ FIGHT!!!